

教育学部附属中学校

組織の目的と特徴

(1) 組織の目的

本校は、国立大学法人熊本大学教育学部に附属して設置された学校であって、公立中学校と同様に教育基本法や学校教育法に基づく中等普通教育を行うとともに、次の使命を持っている。

- (1) 教育研究の実践校である。
大学と共同で教育の理論的・実証的研究を行う。そのために、本校独自の教育計画による教育活動を行う事がある。
- (2) 教育実習の学校である。
熊本大学教育学部学生を主として、教員養成を目的とした教育実習校であり、年間のべ約3ヶ月にわたって教育実習が行われている。
- (3) 地域の学校の研究に協力する学校である。
教育研究の場として、あるいは研究会の助言者として、また、各教科教育研究会の事務局員として、地域社会の中等教育の振興に寄与している。

(2) 教育方針

本校の教育方針の核は生徒の夢を育むことである。その「夢育」のためには、まず教育者自身の感動体験をもとに生徒の前に立ち、感性豊かな教育を展開しなければならない。何故なら生徒たちは感動し“こんなことをやってみたい、あんな人になりたい”というような夢を抱くからである。その夢を「目標」に変え、厳しい知性と豊かな心で響き合い高め合いながら、真実を求めて、努力し、自ら考える意欲的な人間に育つことを強く願うものである。さらに、“美しいものを美しいと感じる”心の醸成と“たくましい精神”の育成は、中等教育における人間形成の基礎として極めて重要なことと考えている。

生徒が学校で成長する過程に思いをめぐらす時、「我々の前にいる生徒たちを、何とかして更に高めたい」という熱い思いが無くして教育は成り立たない。それゆえ教師に一番重要な資質は「生徒に対する限りない愛情であり、夢を与えたいという情熱」である。そして、生徒の意欲を高める議論をする前に、日々、教師自身の学ぶ意欲を高めていることが前提でなければならない。学ぶことの楽しさ、考える喜びを自らが体験して、それを背景に生徒に語り込む実践を積み重ねていかなければならない。

真実探求の精神は自由でなければならないが、規律の厳しさのないところに、真の自由も、創造的精神も育たない。「教えて厳ならざるは、師たるものの罪なり」ということを、教育の基底に見据えておかなければならぬことを念ずるものである。

管理運営に関する自己評価

1. 自己評価の概要

学校教育目標に向けての基本的な考え方は次の3点が根底になる。

- (1) 教育を見つめる視点
生徒がいるから学校があり、学校があるから教師がいる。だから教育を見つめる視点を“それは生徒のためになるか？”と考え、教育活動をすべてこの大きな目で判断し、生徒達のために精一杯努力をしている。
- (2) 生徒に夢を運ぶ
夢を運ぶことが教師の役割である。教師が夢を持ち、生徒に夢を語りながら情熱を持って教えることが最も重要である。
- (3) 生徒の可能性を信じる
生徒は限りない可能性を秘めている。そんなことはできないと考えずに生徒だから

こそできると信じ、彼らの可能性に挑戦することが重要である。そのための高感度のアンテナで、生徒の良さを見抜き、ほめ、励ましながら、学び・考える意欲を伸ばしていく事が大切である。

以上の3点を踏まえ管理運営が行われている。

教育実習・社会貢献に関する自己評価

1. 自己評価の概要

- (1) 教育研究の実践校である。

大学と共同で教育の理論的・実証的研究を行う。そのために、本校独自の教育計画による教育活動を行う事がある。

- (2) 教育実習の学校である。

熊本大学教育学部学生を主として、教員養成を目的とした教育実習校であり、年間のべ約3ヶ月にわたって教育実習が行われている。

- (3) 地域の学校の研究に協力する学校である。

教育研究の場として、あるいは研究会の助言者として、また、各教科教育研究会の事務局員として、地域社会の中等教育の振興に寄与している。

特に教育実習校としてまた研究校として社会へ果たす役割は大きい。

教育実習は、学校教育の全般にわたって、教育技術の習得や教育理論の实地研究を目的とし、将来の教師として必要な基盤を育成することを目標とし、以下の行動目標で行われている。

- (1) 大学で習得した教育理論や技術を、教育の現場で検証し、理論と実際の統合を図る。
- (2) 教育現場から、その実態や課題を学び、教育の理想と照らし合わせながら、解決を図ろうとする態度を身に付ける。
- (3) 生徒や教師と直接ふれあうことで、教育者としての責任感を涵養し、自覚と使命感を高揚させる。
- (4) 自分自身の教職への適正を、実習を通して点検し、自己の課題認識とする。

教育実践研究は、熊本大学との連携及び文部科学省の指定等を受けながら先駆的な研究を行うとともに、公立学校のニーズを把握しながら、公立校との人的な連携協力、情報提供を中心として活動が行われている。各年度で研究発表会と授業実践研究会を行い、多くの参加者を集めている。

【教育実習】

1. 自己評価の概要

教育実習は教師になるための必須条件である。実習を通して、教育という複雑で総合的な課程について理解を深め、教師に求められる知識と技術を身につけることができる。こうした目的を効果的に達成するために、1年次から4年次まで基礎的な実習から総合的な実習へと段階的に進められている。具体的には以下のような観点で指導がなされている。

- (1) 大学で習得した教育理論や技術を、教育の現場で検証し、理論と実際の統合を図る。
- (2) 教育現場から、その実態や課題を学び、教育の理想と照らし合わせながら、解決を図ろうとする態度を身に付ける。
- (3) 生徒や教師と直接ふれあうことで、教育者としての責任感を涵養し、自覚と使命感を高揚させる。
- (4) 自分自身の教職への適正を、実習を通して点検し、自己の課題認識とする。

【社会貢献】

1. 自己評価の概要

本校は地域の学校の研究に協力する学校である。教育研究の場として、あるいは教育研究会の助言者・講師として地域社会の中等教育の振興に寄与している。

また、各教科教育研究会の事務局員として、全国大会をはじめ各大会を運営し、授業を公開する等を行っている。本校の特長を生かし、夏季休業中に公開授業を行なうことや会場の提供等も積極的に行っている。